

結核 第一卷 第一号 創刊の辞

大正十二年三月二十四日発行

日本結核病学会会長 医学博士 北里 柴 三 郎

結核病学会の機関雑誌「結核」創刊に当り、コッホ先生の偉大なる事業を追慕し、ここに結核歴史の一端を綴り創刊の辞となす。

肺病の症状についての記載は遠く耶蘇紀元前より存せり。すでにアリストトレス時代において伝染性なることを唱えられたのであるが、爾來結核に関する知識は毫も進歩せずして中古に及べり。十七世紀の中頃シルヒウス氏出でて結核の解剖的所見に注意を注ぎ、結核Tubercleは本病の特異産生物なりと唱えたり。十八世紀にはランネック氏の肺癆並びにリンパ腺結核研究あり、ウイルヒョウ氏これを承認し結核病理に一条の進歩を与え、西暦一八四三年にはクレンケ氏によりて結核の伝染性なりという事実を家兎の実験において証明し、一八六五年ウイルマン氏はこれを是認し、なお肺結核患者の喀痰を動物に吸入せしむることによりて肺結核を發し斃死することを立証し、もつて肺結核の原因に病毒吸入説を樹てたり。コンハイム氏およびサロモンゼン氏は家兎の眼前房結核接種試験に成功したる等結核の伝染試験は漸く完成せんとしたるも、なお一部の反対学者は遺伝説を固守しおれり。また伝染説賛成者すら各結核病巢の變化につきて一元説を主張する勇氣なかりし。しかるにコッホ先生は西暦一八八一年より結核の研究に従事せられ、種々なる結核性材料を多数の「モルモット」に接種し、常に同一病変を呈することに注意しこれを確かめ、結核は常に一定の生活体によりて惹起せられざるべからざるを信ずるに至れり。而して結核の特異病変中にその原因となるべき微生物を發見せんと努め、新鮮の結核結節を粉碎し塗抹標本を製し、種々なる色素液をもつて短時間または長時間染色し検査するも微生物を認めることができなかつたが、夏季一か月あまりエジプトに旅行して歸りたるのち再び結核の染色検査に従事せられしに、前には検出せざりし「メチーレン」青にて長時間染色した標本より一つの桿状菌を發見しえたのである。これを反復するに結核性産物の塗抹標本にのみ認めて非結核性のものには一つも發見しないのであるが、この桿状菌がはたして結核の病原体に相違なきか否かについては先生がすでに以前の發見においてなされたる方法すなわち陰影写真をなさんとして古き「メチーレン」青に染色した結核の塗抹標本を「ビスマルク」褐にて複染し鏡見した時にコッホ先生は驚喜せられた。すなわち褐色に染まりたる材料中に小桿状菌はなお青色に染まりおりたることにして、これによりて今や菌体をすこぶる容易に認識しうるに至れり。しかるにふたたび結核材料について新しき「メチーレン」青溶液にて二十四時間染色後「ビスマルク」褐にて複染するにこの場合には桿菌の姿を見るをえず、誠に不思議に思われて前の古き「メチーレン」青液にて染色して見ると確かに染色証明せられることから、古き色素中にはこの桿菌を染色するに特殊の能力を有するものありと考えられた。ちよと作業室の空気中にはアンモニアが多く含まれおるから色素液がこれを吸収したためでないかと考え、新しき「メチーレン」青溶液中に少量のアンモニアを加えることによりて染色に役立つべしとの考をもつて実験した結果は予想通りであつたが、なお精細に研究して結果アン

モニアの作用は強「アルカリ」であるというに過ぎないことを確かめ、遂に苛性カリ、苛性ソーダを加えるによりて同一作用を認められ適當の色素液を案出されたのである。

コッホ先生は約半年の間最も刻苦研鑽し、この菌の培養に成功し、なおかつこの純培養をもつて動物実験をなし同一の病的変化を起こすことを証明し、結核菌をもつて結核病原として毫も疑う余地なき確証を得て、一八八二年三月二十四日ベルリン医科大学生理学教室において特に先生のため開かれたる生理学会にUnter Tuberculoseという演題のもとに発表せられた。

コッホ先生がかかる大発見をベルリン大学会においてせずして生理学会においてなされたことは次の如き次第である。

先生は一八八〇年すなわち三十八歳の時初めてドイツ帝国衛生局の医官に任ぜられたるが、その当時ベルリン医会の会長にしてまた医界において宛然王者の如き大勢力ありし病理解剖家ルドルフ、ウイールヒョウ氏と善からずして大いに圧迫せられたるに基づけり。コッホ先生の演説を聞かんとしてベルリンの有名なる学者はかのウイールヒョウ氏を除くほかはほとんど一堂に集まりたり。

または列席したる学者中にはこれまで反対した者もまざりしに、唯一人の討論者なくいずれも驚きと感嘆とをもつてその発見を認めざるをえざりしは実にコッホ先生の研究的頭脳の偉大なることを証して余りあり、これ「コレラ」菌発見の前年の出来事である。

のち先生は感染したる身体の結核菌を化学薬品にて繁殖防止を企てられ、大規模の実験をなされ大いに努力せられしが不成功に終りたり。とはいえども近來欧州においてはほとんど同様の実験を再び繰り返されてあるもまた時代の進転というべし。

先生によりて結核「モルモット」は生菌死菌を問わずこれらの接種に対し一定の反応を呈することが健康「モルモット」と異なるを確かめられ、次いで一八九〇年「ツベルクリン」の創成ありたり。すなわち同年ベルリンにおいて開かれたる第十回万国結核会議にて発表せられたる「ツベルクリン」の発明は一時結核患者をベルリンに來集せしめしがその成績は人の予期にそわざりしをもつて幾多の非難を生ぜしといえども、冷静なる研究の結果結核の治療上優秀なるものたるを認むるに至れり。この発見はただ結核の療法のみならず実に伝染病の療法に一新機軸を与えたるものなり。その後一八九七年には結核菌体をCO, H₂に分ちて、新「ツベルクリン」(H₂)を発表し、一八九〇年には最新「ツベルクリン」を、また晩年に至りて無蛋白「ツベルクリン」の発表あり、いずれも代表的の新製剤にしてその間幾多の学者が多数の類似せる薬品を出せしといえどもほとんどこれが模倣に過ぎざる感あり。誠に先生の研究は時代を指導するの光明なり。人牛結核菌型別の如き、牛結核の病毒の排泄は人の結核に向いてあまり重要ならず、人の結核は結核患者の排出する痰中の結核菌によつて惹起するものにしてこれをもつて最も危険なりとすと理かれしは実に卓絶したる意見にして結核予防上意味深長なりと言ふべし。コッホ先生逝きて四年目の千九百十三年十月開かれし第十一回国際結核会議は各国とも結核予防に向けて大努力をなし療養所並びに労働保険問題に全力を注ぐべく決定し、またわが国においても近時結核の予防に官民協力して努力しつつあり、而して斯学者は結核の予防治療にあらゆる手段をもつて研究し年々幾多の業績を発表せられつつあるは誠に人生の幸福のため意を強うすといえども最後の目的はなお前途遼遠なり。吾人等はますます努力し救世の目的にそわんこと切に望む次第である。

(原文田字を新字に、片仮名書きを平仮名に、一部の漢字を仮名にそれぞれ書き換え、長い一文には適宜句読点を追加した)